大学生が自主的に意見を発するには
—新たな仕組みの提案—

高瀬雄希

日本の大学生は講義の際に、発言することや自分の意見を述べることが少ないと言われている。本論文では、なぜ大学生が発言をしないのか、また、発言をするようになるには何をどうすれば良いのかを研究する。

第1章においては、第1節で日本の大学生が講義の際に発言をどれほど行っているかに関する実態を示す。第 2 節では欧米やアジアの出身の大学生の講義の際の実態に触れ、日本の大学生とどういった違いがあるのか、ということの比較を行う。

第 2 章では日本の大学生はなぜ発言を行わない傾向にあるのか、ということを先行研究から読み取っていく。まず第1節の第1項では文化や大学における講義の環境という学生を取り巻く面について言及する。第 2 節では学生自身が抱えている発言を行わない原因を 4 つに分類した。1 つ目は発言をする意欲はあるものの、発言や質問をすることに関して問題を抱えているケース。2 つ目は教員や学生の態度に問題があるケース。3 つ目は学生自身の資質に問題があるケース。4 つ目はそもそも発言や質問を講義中にする必要性を感じていないケースである。

第 3 章では大学生が発言をしないことに関して、これを問題視している教員が、どのような対策や工夫をして大学生に発言をさせようとしているのかを紹介する。第 1 節では意見を述べ難いと感じる学生に向けた、コメントを収集するシステム。第 2 節では教員が講義の際に座席を指定し、学生の講義に対する関心を高める制度。第 3 節では講義の際に学生が講義の内容について、教員に活発に質問を行い、教員と学生の間だけでなく、学生間同紙においても討論を行えるようにした講義の形。第4節では橋本メソッドという、100 人の規模を超える多人数の講義において活用される、ゼミナール形式のような、学生らのチームによる発表と質疑応答を講義の中心に据えた新しい仕組みを紹介している。第5節において第1節から第4節までで取り上げた、それぞれの取り組みが持つ長所と、それらの取り組みから新たに生じた問題について論じている。

第 4 章の第 1 節では第 3 章で触れたそれぞれの取り組みが抱えている問題点は何かということと、それを解決するにはどういった要素が必要なのかということについて述べている。第 2 節において、学生が発言をしようという意欲を持つために重要な要素について 5 つ挙げている。第 1 項では発言をする「必要性」の重要性が意欲に与える影響について触れる。第 2 項では学習を行う上で大学生が抱く、知的好奇心が与える有益性について触れる。第 3 項では発言をすることに対して抱いてしまう無力感と、その対処法について触れる。第4項では失敗をしてしまった際に抱く、自己否定観とそれを回避する方法について触れる。第 5 項では自主的な意欲を妨げる外的評価を挙げ、如何にしてその影響を和らげるかについて触れる。そして第3節の第1項において、学生が発言をするためにはどのようにすべきなのかを既存の事例を踏まえ、具体的にどのような講義を行うべきか、そしてその講義を行う上ではどのようなことに注意をすべきかについて論じている。これに関連して、第 2 項では具体的な講義の例を挙げた。

第 5 章では本研究についてまとめた上で結論を出し、本研究から得られる示唆と貢献、更に今後の展望として、この研究が抱える問題と、この研究をより価値のあるものとするために、どういったことを行うべきかを述べている。